

トマト葉かび病菌の薬剤感受性と各種薬剤の防除効果

農業試験場 研究員 木村 響

【要約】

日高地域において、チオファネートメチル、トリフルミゾール、ペンチオピラド、ボスカリド、アゾキシストロビン水和剤に耐性の葉かび病菌が確認された。これら5剤すべてに耐性を示す菌株を用いて薬剤散布試験を実施したところ、マンゼブ、TPN、イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤の効果が高く、耐性菌に有効であった。

【背景・ねらい】

ミニトマトの産地である日高地域では、葉かび病の発生が問題となっている。産地では薬剤による防除が実施されているが、多発するほ場もあり、散布薬剤の効果低下が疑われた。そこで、薬剤耐性の発達状況および葉かび病に有効な薬剤を明らかにするため、培地による薬剤感受性検定および各種薬剤の散布試験を実施した。



図1 トマト葉かび病

【成果の内容・特徴】

1. 薬剤感受性検定 県内ミニトマト栽培施設から 92 菌株を分離し、培地による薬剤感受性検定を実施した。チオファネートメチル、トリフルミゾール、ペンチオピラド、ボスカリド、アゾキシストロビン水和剤で、それぞれ耐性と判定される菌株が確認された（表1）。また、検定した5剤すべてに耐性を示す菌株も確認された。

表1 検定薬剤別の耐性割合

チオファネートメチル (トップジンM W)			トリフルミゾール (トリフミン W)		ペンチオピラド (アフエット F)		ボスカリド (カンタス DF)		アゾキシストロビン (アミスター20 F)	
感受性	中等度耐性	高度耐性	感受性	耐性	感受性	耐性	感受性	耐性	感受性	耐性
7%	60%	34%	77%	23%	0%	100%	0%	100%	72%	28%

()内は商品名、剤型：W=水和剤，F=フロアブル，DF=ドライフロアブル

2. 各種薬剤の防除効果 薬剤感受性検定を実施した 5 剤すべてに耐性を示した菌株を用いて試験を実施した。多作用点接触活性化化合物（FRAC コード：M）であるマンゼブ、TPN、イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤の効果が高かった（表2）。

表2 葉かび病に対する各種薬剤の防除効果（ポット苗を用いた耐性菌の接種試験）

FRAC コード	供試薬剤	(商品名)	希釈倍数	防除価
1	チオファネートメチル水和剤	トップジンM水和剤	1500	35.0
3	トリフルミゾール水和剤	トリフミン水和剤	3000	42.5
7	ペンチオピラド水和剤	アフエットフロアブル	2000	2.5
7	ボスカリド水和剤	カンタスドライフロアブル	1000	0
11	アゾキシストロビン水和剤	アミスター20フロアブル ^{※)}	2000	47.5
M3	マンゼブ水和剤	ペンコゼブフロアブル	1000	100
M5	TPN水和剤	ダコニール1000	1000	97.5
M7	イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤	ベルコート水和剤	6000	85.0

無処理区の発病葉率 89%

防除価は、式：100－（処理区発病葉率/無処理区発病葉率）×100で算出

※) ミニトマトに登録なし